
罪の刻印

時雨 呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪の刻印

【Zコード】

Z5831D

【作者名】

時雨 吳羽

【あらすじ】

二人はただ翻弄され、走る。過去の罪は容赦なく一人を攻め立て、搔き乱す。その先に待つのは、禍か福か。

讀いの知らせ（前書き）

この小説には、流血・グロ表現が使われます。

苦手な方は、申し訳御座いませんがお引き取りください。

当小説で不快感を感じられた場合でも、作者は一切の責任を取りかねます。

續いの知らせ

「やつぱり気持ちいいね～。何か思い切り手足が伸ばせるよ」

購入して数日も経っていないことを思わせる一台の黒い普通車が、高速道路を規定内の速さで走っていた。その車の後ろを走る車の運転手なら、誰でもこの黒い車の運転手が初心者であることを知る。常に外気に晒されてすぐに汚れるはずの若葉マークは、けれどもその色を青々とさせ、眩しいくらいだった。

黒い車の助手席では、一人の少女が思い切り伸びをしている。彼女の名は上原由貴。うえはら ゆき 音大生で、来月から一年生になる。

「やつぱり免許とつて正解だつたね、お兄ちゃん」

彼女は言いながら、大きな瞳を隣の運転席に向ける。兄の顔を覗き込むようにすると、彼はちらりと妹に目を走らせた。

「そうだな。でもまだ緊張する、かもな」

はは、と苦笑すると、彼はまたすぐに前方に目を戻してしまった。だが由貴は兄がいつも自分を気にかけてくれていていることを嬉しく思つていた。

つい一週間前によつと免許をとつた由貴の兄、上原翔太は妹より一歳年上で、すでにコンピュータプログラマーとして働いている。上京して有名音楽大に通う妹の下宿先は、彼のアパートだつた。「でも、これでしそつちゅう家に帰れるようになるよね。お父さんとお母さんだつて喜んでくれるはずよ、絶対」

由貴は心底嬉しそうに言う。今まで電車を数本乗り換えなければ実家に帰ることが出来なかつた。そのために行き来が面倒になり、二人は中々帰ろうとしなかつたのだ。

だが車となれば話は違うだらう。面倒な乗換えはない。人込みに流されることもない。

生まれつき体の弱い由貴にとって、車は最高の乗り物なのだ。特に気兼ねなくできる兄や両親の運転するものは。

東京から地方へ向かう高速道路は、思いの外快適だった。パーク

ングも大型のものが多く、両親への土産物にも困らない。

「だといいけど。それより、今日は連休の初めだってのに……ガラ

ガラなんだな」

翔太は気味悪げにバックミラーを見やる。慣れないためか、その瞬間少し車が揺れた。

家を出る前からずつと混雑を覚悟していた二人には拍子抜けだった。

最初こそ数台ちらほらと見かけたものの、今では一人のもの以外には全く車を見受けられない。連休初日と「うことを抜いても、異常なことだった。

「そうね……でも、所詮は都会もこの程度なのよ」

由貴はふふ、と軽く笑って返す。

翔太もそうかもしれないな、と返そうとした、次の瞬間。

ガツッ

車の後方から、嫌な音が響いた。同時に一人の車が大きく揺れる。「きやつ！？」

由貴は短く悲鳴を上げ、思わず頭を抱えた。翔太は慌ててハンドルを回して側面の壁との接触を回避する。

ギリギリのところで車は進むべき方向に頭を向けた。翔太は一瞬で早まつた動悸を抑えようと、左手で胸を抑える。

大量に吸つたわけでもない空気を、体から無理やりに押し出した。動悸は、しばらく治まりそうにない。

事故は回避した。回避はしたが、翔太の頭は早くも混乱し始めている。何があつた？ 今の衝撃は？ 耳に残る、あの音は？

「お、お兄ちゃん、今……」

妹の不安そうな声を無視し、彼は必死で混乱を収めようと努力した。車は高速道路の上。止まるわけにはいかない。それだけを理解し、アクセルを踏み込む。

「くそ！」

途端、次は右方向から衝撃を受けた。勢いで妹の乗る助手席のドアが壁と接触したらしく、金属が擦れる音が車内に響いた。

「いやつ！」

由貴は抱えた頭を翔太に摺り寄せてくる。音と振動に耐えようと、彼女は身をよじった。

翔太が窓の外を見やると、さつきまで一台もなかつた車が一気に増えていた。しかも、一人の乗る車を取り囲むように。ガツッ、と、今度は左後方から衝撃を受け、由貴が思い切り前につんのめる。翔太は妹を気にかけつつ、そちらを振り向く。そこからはスマートをつけた助手席側の窓が見えるだけだったが。

「由貴！ 大丈夫か？ ……何なんだよ、こいつら！」

翔太は苛立ちに体を任せ、右の握り拳でハンドルを思い切り打つた。

あがな
贖え。

突然、耳元に声が聞こえた。ハツとして声の聞こえた方角に顔を向けると、翔太たちの車の横を寄り添うように走っていた車のスマートガラスが下がり、女性の顔が見えていた。

翔太と女性の目が合うと、女性は叫んだ。

『贖え！…』

高鳴るエンジン音にも負けずに、その声は翔太にも、由貴にもはっきりと届く。

翔太は思わず目を見開き、女性を凝視してしまう。“贖え”だつて？ 何の話なんだ。

とにかく、またぶつけられる前にこの車を抜き去つてしまおう。翔太はそう考え、強くアクセルを踏み込んだ。

「お兄ちゃん、今のは何……？ 賠えって、何？」

兄に問う由貴の声は、女性の叫んだ時の表情が恐ろしかつたのか、震えている。

「俺だつて知らない！」

翔太は半分叫ぶように答えた。そんなの、俺だつて知りたい。

幸いにも困まれていたのは車の側面と後方だけだった。前方には、ただ道路だけがある。

一気に追い抜いてやる。

翔太がアクセルを思い切り踏むと、車は真っ黒な排気ガスを巻き上げながら周りの車を引き離した。

「お兄ちゃん、料金所がある！ とにかく一度降りようよー。怖いよ……」

助手席で、由貴が分かれ道を指差して言う。だがその言葉は尻すぼみになり、最後は消えるようだった。

最初にぶつかられた時の衝撃は、由貴にとって少なからず恐怖をもたらしていたのだ。

「よし、降りよう。他にも車があれば、あいつらだって下手に手出せないはずだ」

翔太はバックミラー越しに、小さくなっていく車たちを見やる。どうやらこれ以上追いかけて来る気はなさそうだが、用心するに越したことはないだろう。

律儀にも左側にワインカーを出し、翔太はハンドルをきつた。

罠・獲・あと一歩

いつまで経つても、彼らの目指すゴールは見えてこなかった。苛ついてアクセルを思い切り踏んでも、ただ変わらぬ高い壁の間を進んでいくだけだった。

「お兄ちゃん……おかしい。料金所が、こんなに遠いわけない……」

由貴の不安そうな声が、車内に広がって溶けていく。

翔太はあえてその問いには答えなかつた。そんなことは、運転する彼が一番よく理解している。

そんなおかしな道路を走り続け、十分も経過した時。

「なんだ、あれ……」

久しぶりに見えた壁以外の色は、緑。

前方に、鬱蒼と繁る森があつた。道路と森の間に道は、ない。彼らを取り囲むように、木々が立ちはだかつていた。

仕方なく、翔太はブレーキを踏む。道路から外れて土の上を滑つた車は、土埃を舞い上げながら木々の直前で止まつた。

「嘘、何ここ？ どうして高速から森に直接繋がつてるの？」

そんなもん、俺が訊きたい。

翔太は心中で妹にそう返しながらシートベルトを外し、ドアを開けた。

外の空気は、森独特の爽やかさと湿氣を含み、彼を包み込む。少なくとも夢ではあるまい。幻影、でもなさそうだった。

続いて車を降りてきた由貴が、不安のためか兄に擦り寄る。

「ここからは車は使えなさそうだ……しばらく待つて、アイツらが追つてこなかつたら引き返してみよう」

森に入るのは最後の手段だと、翔太は考えた。ここまで鬱蒼とした森に入り込んでしまえば、迷わないはずがない。中は陽の光もなく届かないだろう。

由貴もその考えに同意したのか、微かに頷いて森を見上げる。彼女にとつて、謎の集団に追いつかれることと森に入ることは、同じくらいの恐怖に思われた。

特に、場違いに森の中から突き出している高層ビルには、何か良くなき気配が漂つていいる気がした。

「追いついてきたら車でも逃げられないし、繁みに隠れていよう。もしもアイツらが追いついてきたら、そのまま森の中に逃げる」「うん、わかった」

来るな、来るな、来るな。

森という逃げ道があるにも関わらず、翔太は恐怖で取り乱しそうな、ギリギリの所で平静を装っていた。もし由貴という妹がいなければ、すでに発狂していたかもしぬれない。

それほどに、あの女性は異常な雰囲気を持つていた。“贖え”と、一人に要求してきた、あの女。異常なほどに興奮し、目玉が飛び出さんばかりに目を見開き、血走らせていた。

まるでホラー映画、いや、映画でない分、性質が悪い。

一人は繁みに身を隠しながら、森を目前として途切れていアスファルトとコンクリートの壁を睨むように見る。

妹を引き寄せ、大丈夫だ、と沈黙の内に語りかけるうち、翔太は“大丈夫。”を自分に語りかけているように思えてきた。最早、妹さえも顧みる余裕がないとでも言うのか。

翔太は自分の露見した不甲斐なさに舌打ちし、妹を抱き寄せる腕に力を込めた。

翔太と由貴を追つていた数台の車は、標的とする車が料金所の看板の下を潜り抜けたのを見届けるとスピードをがくりと落とした。その内の一台を運転している女が、ハンドルの横に取り付けられた通信機に手を伸ばす。長く黒い髪を、高い位置で一つに括っている女だ。翔太に”贖え”と叫んだ女性でもあった。

その女が通信機に向かつて何事かを喋れば、周囲の車全体から、ほ

ぼ同時に同じ女の声が聞こえてくる。内容は、他の車への指示のようだ。

通信終わり。

そう言った女は、口元にニイと笑いを浮かべた。

「見つけた……捕まえてやる、捕まえてやる……ッ！ 賞え！！」
貴様らは既に、死刑台に登り始めているのだから。自らの罪を悔いながら、地獄へと落ちて行け。奴等に凶を、この手で……！！

数台にも連なるその車の一団は、”料金所”と書かれた看板の下を潜つて行つた。

罷・獲・あと一歩（後書き）

長らくの執筆停止、申し訳ありませんでした。
作者多忙のため、更新頻度は遅々なるものですが、ご理解頂けると
嬉しく思います。
罪の刻印、これからも続いていきますのでどうぞ宜しくお願い致
します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5831d/>

罪の刻印

2010年10月10日01時44分発行